



対馬丸通信

財団法人
対馬丸記念会

対馬丸記念館と遺族やサポーターを結ぶ、ふれあいのコミュニケーション紙

「対馬丸記念館」を皆の力で育てましょう



財団法人対馬丸記念会 会長 高良 政勝

寒中お見舞い申し上げます。

昨年8月久しく待ち望んでいた「対馬丸記念館」がやっと開館しました。これもひとえに皆様のご協力のおかげと深く深く感謝いたします。

展示すべき遺品・遺影が極端に少なく当初来館者にどれだけのものが伝えられるか危惧されました。しかし外間副会長を中心とする展示グループの研究のおかげで、見る人に感銘を与える内容になったのではないかと思います。記念館を訪れる県内外の人々から好評を博し私どももほっとしているところです。開館当時101点だった遺影も、開館後皆様の関心が高まりわずか3ヶ月の間に遺影61点(67名分)が集まり、昨年12月9日に追加展示しました。まだご来館されていない方はぜひ早めにおいでいただきたいと思います。

記念会では展示内容を充実すべく昨年2月にハワイ・ボーフィン号記念館訪問、12月琉米歴史研究会(喜舎場静夫理事長)の協力を得て対馬丸生存者・上原清氏(70)とボーフィン号元乗組員ジョセフ・マイケル・ノックス氏(81)とフロリダ州で対面を実現、その後米国立公文書館(ワシントンDC)やボーフィン号記念館を再び訪問数多くの資料収集を行いました。

また生存者や遺族による語り部活動は年間延べ50回に及びました。

今年は終戦60周年。県内はもとより全国的に平和記念[祈念]事業が展開されることでしょう。対馬丸記念館では3月に元高松高等裁判所長官の故石田壽氏(ゆたかはじめ氏ご尊父)の「長崎原爆写真展」開催を皮切りに、琉米歴史研究会の協力を得て「沖縄戦未公開写真展[仮称]」(夏頃)、独立行政法人海洋研究開発機構のご協力「対馬丸船体発見の経緯」並びに県内にある関連施設OGDACの特別展(夏休み頃)を予定しております。多くの皆様のご協力を得てぜひ成功させたいと思っております。

今年は「災」もなく平和な年になりますように、又「対馬丸記念館」が皆様のお力をお借りして立派に育っていきますよう祈念します。

対馬丸記念館 現況報告

有料入館者10,000人はなんとか達成。 来期へ向け尚一層の来館者増を目指す。

昨年8月22日の開館から約五ヶ月が経過しました。この間の来館者数等記念館の現況を纏めてみました。

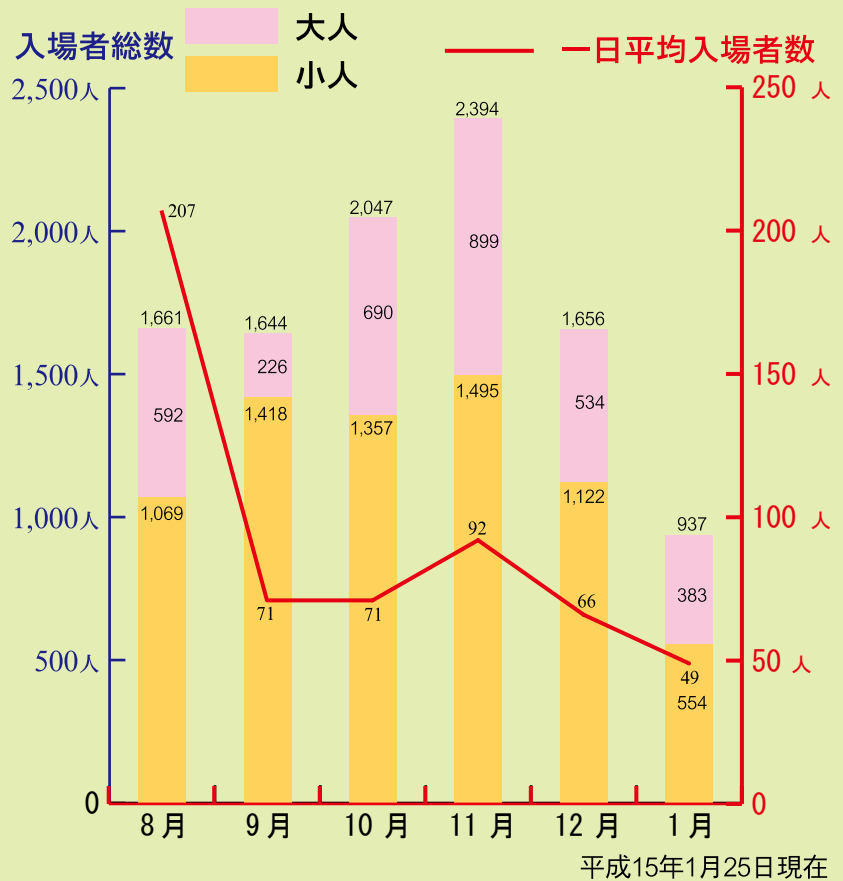
早いもので対馬丸記念館が開館して約五ヶ月が経過しました。この間、マスコミを始めいろいろところで、情報発信を行い、認知度の向上に努めてまいりましたが、入館者数で捉えれば、まだまだという状況が続いています。

開館以来の状況をグラフにしてみました。1月25日現在で、稼働日数128日、有料総入場者数10,339人、一日平均入場者数80.7人という厳しい数字が出ています。

右のグラフでお解りの通り、11月の行楽・修学旅行シーズンをピークに減少傾向にあります。事務局としては今年の終戦60周年に向けた企画展実施し、入館者増へ向けた施策をこうじる予定です。

遺族・協力会の皆様方におかれましても、更なる支援・ご協力をお願いいたします。

月別入場者総数と月別一日平均入場者数の推移



来館者アンケートより

◆23歳、男性、具志川市

今、僕らが朝起きて、水を飲み、太陽の光を快く感じる事がどんなに幸せなことか、とても感じました。家族がいて、何不自由なく暮らせる毎日に感謝するとともに、ここで感じた気持ちを多くの人に伝えるべく、僕に何が出来るか日々考えていきます。(2004/10/5)

◆17歳、女子高校生、神奈川県

最初「対馬丸ってなんだ?」と思いながら眺めていて、まわっていくうちに沢山の子どもが何の罪もないのに死んでいく様が見れて、自分がちっぽけに思えた。今自分にできる最大の力を「平和」という世界につなげていきたいと思った。(2004/10/6)

◆16歳、女子高校生、神奈川県

自分より全然小さな子どもたちの写真を見て、胸が痛かったです。言葉では表現できないほどの無念さと悲しみがありません。壁の詩を見たとき、本当にそう思いました。きれいな沖繩だけど、そういう歴史があるということをしっかり勉強して帰りたいと思います。(2004/10/6)

◆31歳、男性、那覇市

犠牲者の遺影、遺品がとても印象的でした。写真や服に込められた様々な思いが表れていて、子供たちの叫び声が聞こえてくるようです。(2004/10/8)

◆30歳、女性、石垣市

いま私は妊娠中で、おなかの中に子どもがいます。もし我が子が・・・と想像するだけでも、悲しい思

いです。人が亡くなるということは、多くの人を悲しませ、苦しめることです。今、まだ戦争をしている国があります。いつかこの世から戦争や殺人がなくなってくれることを願います。(2004/10/8)

◆16歳、女子高校生、神奈川県

ここへ来る前に、アニメ映画を見てある程度のことには知っていましたが、この展示を見て、とてもこわくて悲しかったです。アニメだけを見ると、どこか遠い世界の話のように思えましたが、ここへ来て、本当にあったことなのだ改めて実感しました。やはり戦争はこわく、そして悲しいもので、決してやってはいけないと思いました。(2004/10/15)

◆9歳、女子小学生、東風平町

ビデオなどが見れてとてもうれしかったです。あんまり対馬丸のことがわからなかったのが、ここに来て対馬丸博士になれた気分です。(2004/10/17)

◆女性

対馬丸のことは、自分たちも疎んじてからわかりました。自分たちは無事についたのに、身代わりになられたかと思うと悲しくなりました。この度、こんな立派な記念館が出来て、改めて感涙いたしました。涙で字も読めないほどです。悪い戦争でこんな沢山のかわいい子どもが命をおとしました。またと戦争はあってはならないと思います。記念館を作られた皆様方、本当にご苦労さまです。戦争の戒めだと思います。(2004/10/20)

◆13歳、女性、中学生、那覇市

戦争でたくさんの人たちが亡くなって、沢山の人が悲しんで、「生きたかったけど生き残れなかった」という思いがたくさんあった。私は今から戦争を始めた人たちを許しません。絶対許しません。(2004/10/23)

◆17歳、男子高校生、東京都

戦争の痛みをみんなにわかってもらおうという気持ちがとても伝わってきました。これからも、いろんな人達にこの痛みを伝えていって欲しいと思います。(2004/10/27)

◆17歳、男子高校生、東京都

胸が苦しくなりました。二度と戦争が起こらない世の中になります。必ず。(2004/10/27日)

◆17歳、学生

やはり戦争はいけないと思った。そんなこと、前からわかってはいたけど、この展示で、亡くなった人の名前や生き残った人の体験談を見たり聞いたりして、戦争の怖さ、無意味さを改めて実感した。そして、現在のこの平和(未だに戦争が行われているところがあるのが残念だが)を絶対に守っていくと決意した。戦争の犠牲になってしまった人たちのためにも、戦争をしない勇気、戦争をやれと言われても断る勇気を持ちたいこの展示を見て思った。(2004/10/29)



対馬丸事件から60年 元米潜水艦乗員と対面

対馬丸記念会評議員・生存者 上原 清

私は対馬丸記念会訪米調査団の一員として2004年12月13日～23日の日程で訪米をした。調査員は財団法人対馬丸記念会評議員で生存者でもある私と、NPO法人琉米歴史研究会理事長の喜舎場静夫氏の二人である。調査団にはQAB琉球朝日放送から記者とカメラマンの二人が同行し、ドキュメンタリー取材も行った。

今回の訪米調査の目的は大きく分けて二つあった。一つは米潜水艦ボーフィン号に関する追加調査及び資料収集で、もう一つは撃沈された対馬丸の生存者である私と、魚雷攻撃をしたボーフィン号の元乗組員との初めての対面であった。

思えば60年前対馬丸は撃沈され、私は約一週間死の漂流をした。多くの犠牲者を出したその悲劇の中で私は地獄のような死の海から這い上がり生還することが出来た。しかし同じ生存学童でも、愛する家族を失った者は心の傷が深く、いまだにその痛みを引きずっている者もいる。「ボーフィン号を見たくはない」とその人は言う。悲しみの中で生きてきた多くの遺族たち…。特に子どもを失った親たちの気持ちは筆舌に尽くせない。中でも大事に育てた一人息子を亡くした老いた母親の嘆きを思うと私の心は痛む。亡き子どもの歳を数えて悲しみの中で暮らしてきた老いた親たちや遺族のなかにはまだ心の傷の癒えてない人々もいる。そのような遺族の悲しみを背中に感じながら私はボーフィン号の元乗組員と会おうとしている。今の

私の中にはボーフィン号や乗組員に対する憎しみや恨みの感情はない。しかし今もなおその感情を引きずって苦しんでいる遺族もいるであろう。その遺族の人たちの心の痛みを考えると私の心は重い。しかしボーフィン号の乗組員も皆高齢になっている。彼らと対峙できるチャンスは今しかないと思いを決して出発した。

太平洋戦争中ボーフィン号は第1回から第9回のWar Patrolに出撃している。第1回のWar Patrol(1943年〈昭和18年〉8月25日～10月10日)から第5回War Patrol(1944年〈昭和19年〉4月25日～7月21日)までは南太平洋方面への出撃であった。その間ボーフィン号を含む米潜水艦は日本本土と南アジア諸国や南太平洋諸島との輸送路を壊滅させるために作戦を展開していた。そして多くの艦船を撃沈し、米海軍は「真珠湾の復讐鬼」と呼んだという。その「真珠湾の復讐鬼」ボーフィン号が南西諸島の日本領海内で輸送路の壊滅作戦を展開するためにハワイの真珠湾から出撃したのが第6回のWar Patrol(1944年〈昭和19年〉7月16日～9月



出発に先立ち、会長メッセージを預かる



アルバム前に説明するノックス氏、喜舎場氏と私



(4) 平成17年2月15日

13日)である。そのWar Patrol中の「運命の日」8月22日に対馬丸は鹿児島県悪石島沖でボーフィン号の魚雷を受け沈没した。その時の乗組員に会うのが私の最大の目的である。ところがその肝心のSix War Patrolの乗組員は最初の対面場所には一人も来なかった。なぜ彼らは来なかったのだろうか……。それにはいろいろ複雑な理由があろうと思う。太平洋戦争は日本軍の真珠湾攻撃から始まった。その時真珠湾にいた米海軍は多くの軍艦が撃沈または大破され、多くの将兵たちが死傷した。今でもそのとき撃沈された戦艦アリゾナが当時のまま無惨な姿で沈んでいる。太平洋戦争中、米海軍の兵士たちは「真珠湾の復讐」を胸に日本軍と戦ったとのことである。あれから60年の歳月が経ち、多くの将兵の心の中からは「復讐」と言う文字はもう消えたことであろう。しかしいまだに戦争の心の傷跡が完全に消えず残っている元将兵もいるかも知れない。私の訪米に対して、対面を拒否かまたは避けた元乗組員もいたようである。

私はこれら元乗組員との対面の難しさを痛感した。そしてその厳しい現実直面して胸中複雑な思いであった。しかし、「The Pearl Harbor Avenger(真珠湾の復讐)」の著者でボーフィン号の元乗組員のロバート・ベイノン氏(Six Patrolには参加していない)やドキュメンタリー作家のジョージ・ファイファー氏、喜舎場氏らの電話での懸命の説得によりSix Patrolの元乗組員ジョセフ・ノックス氏が会うことを承諾してくれた。

最初の対面予定地から9時間と言う長い時間を移動してやっとノックス氏の家の前に到着した。しかし、互いに複雑な心境であることから、ノックス氏との対面は再度彼の了解を得てからがよいということで、ファイファー氏と喜舎場氏の二人が先に車を降り、彼との話し合いにいった。

約10分後にノックス氏は二人と一緒に家から出て

きた。私は車から降りて、庭に立っている三人のところへ歩いていった。そしてやや緊張しながらも穏やかな顔で私を待っているノックス氏と握手をした。私が「I'm verry happy to meet you.」というとき彼は嬉しそうな顔をして「Welcome here. Welcome Welcome」と私を歓迎してくれた。私たちは誰からともなく自然に抱き合っていた。

対馬丸を撃沈した米潜水艦ボーフィン号の乗組員と対馬丸生存学童が60年の歳月を経て初めて対面した瞬間であった。私たちは彼の家に招き入れられ、約1時間彼のアルバムを見ながら話し合った。彼は対馬丸に多くの子どもたちが乗っていることは当時知らなかったといい、767人も子どもたちが死んだことに対して「戦争は地獄だ。」と悲しい顔をした。そのアルバムは彼の好意で私たちが借り受けて沖縄に持ち帰ることにした。アルバムにはボーフィン号や乗組員たちの写真が多数おさめられており、当時を知る上で貴重な資料となると思う。私が持参した私自身の遭難の模様を描いた数枚の絵をあげると、彼は「Thank You.」と素直に受け取ってくれた。帰るときには彼は庭に出てきて、手を振って私たちを見送ってくれた。

私は今回の訪米の目的である元乗組員との対面という大任を果たすことが出来た。ノックス氏が言った「戦争は地獄だ」という言葉が示すように、太平洋戦争は日米双方に多くの犠牲者を出した。戦争が無ければ対馬丸という悲劇は起こらなかった。

その意味では対馬丸を沈めたのは戦争という悲劇である。会長から託された恒久平和のメッセージには戦争はすべての人が被害者であるという旨のことが書かれていたが、今後は戦争の悲惨さを知っている者同志が、心の交流を深めながら平和の大切さを後生に伝えて行かねばとの想いを益々深くした。



トピックス

10月13日(水)

対馬丸記念館表札掲示

日本書道界に広くその名を知られる、ちはら書藝会主宰の茅原南龍先生の筆による記念館表札の掲示式が行われました。茅原先生は当会の依頼に対し、犠牲者の鎮魂になるならと、こころよくお引きうけくださり、琉球松にすばらしい揮毫をしていただきました。



12月25日(土)

訪米調査報告会見

対馬丸記念会訪米調査団が収集してきた、米国資料がマスコミ公開されました。

収集資料は、ボーフィン号乗組員の写真類64点と、ボーフィン号関係海軍文書14点(対馬丸に関する無線傍受記録等を含む)、潜水艦や船舶、戦史関係の洋書11冊等です。



ただいま資料の情報公開の準備をすすめています。

12月12日(日)

遺影追加掲示

館内1階の遺影コーナーに遺影の追加掲示が行われました。今回追加掲示された遺影は開館後お寄せいただいたもので、12月9日までの61枚67人分が追加されました。これにより現在館内の展示が161点となりました。事務局には現在も遺影や遺品が寄せられています。次回の追加掲示に向けて、さらなる収集にご協力をお願いいたします。



平成16年11月6日(土)

琉米歴史研究会と情報・資料収集の協力提携

対馬丸記念館2階会議室において、財団法人対馬丸記念会と琉米歴史研究会は、相互間における協力関係について記者発表し、提携を結びました。対馬丸記念会は琉米歴史研究会の法人会員に登録し、琉米歴史研究会は対馬丸記念会の資料収集



員として登録されました。これによって、対米関係の資料収集に強力な布陣ができました。

12月2日(木)

第1回対馬丸記念会 歯科健康相談会

対馬丸記念館遺族相談事業の初回は、南部地区歯科医師会のご協力により歯科健康相談を実施いたしました。当日は南部地区歯科医師会会長の山川修先生による、「歯周病と入れ歯」の講演のあと、4人の先生による歯科健康相談が行われました。



企画展 予 告

被爆直後の長崎・建造物破壊の記録

石田壽長崎原爆写真展

時:平成17年3月1日(火)~31日(木) 所:記念館企画展示室
企画:NPO法人琉米歴史研究会 協力:長崎原爆資料館 ゆたかはじめ

今年最初の企画展として、元高松高等裁判所長官で、当時長崎地方裁判所長だった、石田壽(ひさし)氏が被爆直後の長崎の街を撮影した写真展の開催が決定しました。

石田氏は県内で活躍中のエッセイスト、ゆたかはじめ氏の御尊父にあたられます。また被爆直後に書かれた「雅子艶(たお)れず」の著者石田雅子さんの御尊父でもあります。3月6日(日)と13日(日)には、ゆたかはじめ氏の講演も予定しています。

今回の企画展は、長崎原爆資料館のご協力で石田楨(石田壽氏婦人)さんが寄贈された貴重な写真をお借りすることができました。沖縄初公開の写真ばかりです。多数のご来観をお待ちしています。



石田壽長崎原爆写真展によせて

エッセイスト ゆたかはじめ

父の長崎原爆写真展が、沖縄で開かれるとは思っていませんでした。遺族の一人として有り難く、そして嬉しく思います。

被爆後、フィルム入手も困難なときに撮影された写真の数々は、父が亡くなった後、私の義母にあたる亡妻石田楨(まき)が原爆資料館に寄贈しました。昨秋長崎で初めて公開されたのをきっかけに、今回の対馬丸記念館での企画展が実現したのです。

私は原爆投下の数ヶ月前、東京から赴任した父について長崎に行きました。連日空襲に悩まされていた東京に比べ、長崎はなんと穏やかで明るい街だったでしょう。学生だった私は東京にすぐ引き返したため、被爆したのは父と14歳になる妹の雅子でした。

原爆のあと、私が訪ねた長崎の街は、たった1発の爆弾で見渡す限りの砂漠と化していました。爆心地で被爆した雅子は、地獄絵を見ながら逃げまどい、九死に

石田 壽氏略歴

- 1895年(明治28年)4月11日 父石田精一(元判事・弁護士)の二男として福岡市に生まれる。
- 1920年(大正9年)7月 東京帝国大学法学部法律科卒業後、三菱合資会社に入社。
- 1924年(大正13年)5月 東京地方裁判所判事
- 1936年(昭和11年)3月 内閣総理大臣秘書官(広田弘毅首相)
- 1944年(昭和19年)3月 東京区裁判所監督判事
- 1945年(昭和20年)3月 長崎地方裁判所長
- 1945年(昭和20年)8月 長崎市に原爆が投下され、被爆。その後、「平和は長崎から」を訴え、長崎原爆資料保存委員会の委員、(前)長崎国際文化協会会長等を努め、原爆資料の保存や平和祈念像建設に力を尽くす。また、昭和21年~23年にかけて長崎の街を撮影した。
- 1951年(昭和26年)5月 京都府地方裁判所長
- 1957年(昭和32年)8月 高松高等裁判所長官
- 1960年(昭和35年)2月 1960年(昭和35年)2月 退官
- 1962年(昭和37年)2月20日 66歳で死去
- 1989年(平成元年)7月 石田壽氏の遺族より、長崎国際文化会館(現原爆資料館)へ同氏が撮影した原爆被害写真ネガ157枚、被爆資料11点が寄贈される。

一生を得ましたが、多くの友達を失い原爆症に悩まされました。父はこの惨状を後世に残したいと、カメラを携えて原爆の跡を訪ねまわっていました…。

対馬丸が向かっていた先は長崎でしたし、長崎県の対馬は写真寄贈者石田楨(まき)(石田壽の妻)の出身地です。これも何かのご縁でしょう。戦後60年本土の市民もひどい目に遭っていたことを知り、平和への願いを新たにしていだければと思います。

プロフィール

本名 石田穰一(いしだ・じょういち)
石田寿(いしだ・ひさし・原爆落下当時の長崎地裁所長)の長男
略歴:1928年 東京生まれ 東大法学部卒業 東京で長く判事を勤める
1993年 東京高裁長官を定年退官と同時に東京から夫婦で沖縄へ移住
その後沖縄県行政オンブズマン 沖縄キリスト教短大教授を勤める
現在:美ら島沖縄大使・沖縄県地域作りアドバイザー・琉球朝日放送番組審議委員を勤めるほか 執筆・講演・テレビ・ラジオ出演などの活動をしている
趣味:鉄道・旅・街歩き・芸能・琉球文化・食べ歩き など
著書:沖縄の心を求めて (おきなわ文庫 ひろぎ社 1984)
自分を輝かせてみませんか (ポーター・インク 1997)
沖縄に電車が走る日 (ニライ社 2000) など

編集後記

遺族・協力会会員の皆様、良いお年をお迎えになられましたでしょうか。
開館2年目を迎える今年は、酉年の鳥のように大きく羽ばたくことが出来るようにとの想いで、企画展をいろいろと展開する予定です。ご期待ください。

財団法人 対馬丸記念会

〒900-0031 沖縄県那覇市若狭1-25-37 TEL.(098) 941-3515 FAX.(098) 863-3683
e-mail: info@tsushimamaru.or.jp URL: www.tsushimamaru.or.jp/